

動物の「言葉」をヒトに伝える

動物学者 松原始

ヒュー・ロフティングの『ドリトル先生』

シリーズでは、動物たちはみな言葉をもち、人間と同じように話している。だが、現実世界では、イヌ語もワシ語もオオガラスウミカタツムリ語も、確認されてはいない。言語が人間に特有のものであり、人間にのみ許された天賦の才であるのか、それとも動物の進化のうえで生じた習性の一つにすぎないのか。これはさまざまな議論を呼

より客観的で冷徹な視線こそが求められているし、論文は誤解の余地のない言葉で書かれなくてはならない。「私はこう思った」などというあやふやな情報は不要である。

だが、一般向けに解説するときにはちょっと違う。こういう場合は、科学が言語に要請する縛りをもう少し緩めることにしている。より自由な、自然な言葉こそが、読者や観衆に、よりビビッドに、直感的に、事実を伝えられるときもあると考えているからだ。

例えば、カラスの巣立ち雛の近くで、親鳥が鳴いているとする。カラスの巣立ち雛は飛ぶのが下手なので、しばしば非常に低いところに（ときには地面に）いる。親鳥は雛に近づくものに対して威嚇声をあげることが、それでも相手が近づいてくると、止まっている枝や電線を嘴でカツカツと叩く。もちろん、これを「外敵が近づいてくるが、直接攻撃するには大きな相手であるため、フラストレーションがたまったことによる転嫁行動」と表現してもよい。だが、私は『カ

んできたが、今のところ、ヒトのような言語体系をもち、言葉を操る動物は見つかっていない。とはいえ、ペッパーバグという研究者が飼育していたオウムのアレックスは、英語を理解して受け答えしていたのみならず、色や数といった抽象概念さえも理解していたようである。

シジュウカラという小鳥でも、鳴き声の順序によって反応が変わることが発見されている。さらに、対へび用の警戒声を聞いた後はちゃんとへびを思い浮かべているらしいことも、巧妙な野外実験によって示された。彼らの鳴き声は、単に「音声刺激——反応」という単純なものではなく、より複雑なものであるらしいことが垣間見えてきたわけである。

私は二十年以上カラスを研究しているが、カラスもまた、複雑な音声コミュニケーションをもった動物だ。だが、その音声について我々が知っていることはあまりにも少なく、意味が推測できる鳴き声も決して多くはない。無論、反応が非常に定型

ラスの教科書（雷鳥社／二〇一三年）の中で、この行動を「さっさとどけゆーとるやろが、聞こえんのかポケ」とカラスの心の声にして表現した。人間ならば、まさにこのような言葉で心理状態を表現する状況なのだろうな、と推測したからである。いわばこれは手探りの翻訳、語彙や文法という裏付けのない、心理状態を推測して当てはめて表現する、というかなり大胆なマネであった。

無論、これは一般書だからできたことで、それにしても擬人化しすぎているとの批判を受けても仕方ない。だが、長年動物を観察していると、対象動物の「気分」あるいは「やりたいこと」が推測できる（ような気がする）場合はままあるのだ。これを全て「観察者の気のせい」として無視するのは惜しい気がする。もちろん、ここには思い込みや、自分の考えの投影などがたっぷり含まれており、ニュートラルな観察事実とは言い難い。それでも、言葉が本来もっている「伝える」という機能を考えるとき、

的で、意味が推測しやすい場合もある。例えば、営巢中の（ということは繁殖相手がいる）ハシブトガラスのメスに「かららら」とうがいのような声を聞かせると、反射的に姿勢を低くし、翼を半開きにして口を開け、「グワワワワ」と鳴く。これはベギングコールといって、オスが餌をねだる声である。「かららら」の方はオスがメスに餌を渡す前にしばしば発する声だ。おもしろいことに、この「かららら」は人間が真似しても、メスから同じ反応を引き出すことができる。自分でやってみたことがあるから間違いない。つまり、「そこにパートナーがいて餌を持っている」といった視覚刺激や状況認識をすつ飛ばして、聞いた瞬間に反応してしまうような音声なのだ。これはまさに信号と呼ぶべきだろうが、それくらい単純でないと、動物の「言葉」の意味を推測するのは難しい。

私の仕事はカラスを観察し、データを解析し、考察して結論を述べることだ。この過程でカラスの言葉を理解する必要はない。

可能なかぎり客観的に判断したうえで、その状況をさらに「人間でいうならば」と置き換え、翻案し、理解しやすいコトバに変換する——そういった「動物の『言葉』から人間の言葉への翻訳」という作業は、場合によっては許されるのではないかと思う。とはいえ、科学の枠を踏み外さないかヒヤヒヤものなのではあるが。



松原始

1969年奈良県生まれ。京都大学理学部卒業。同大学院理学研究科博士課程修了。京都大学理学博士。専門は動物行動学。東京大学総合研究博物館勤務。研究テーマはカラスの生態、および行動と進化。著書に『カラスの教科書』、『カラスの補習授業』（ともに雷鳥社）、『カラス屋の双眼鏡』（ハルキ文庫）、『カラスと京都』（旅するミシン店）、監修に『カラスのひみつ』（楽しい調べ学習シリーズ）（PHP研究所）、『こっぼんのカラス』（カンゼン）等がある。